一般講演要旨

第1群 良性腫瘍

1. 子宮内膜症の臨床的観察

(日大)

馬島 季麿, 吉田 孝雄, 前田 勇
岡田 秀彦, 川村 俊夫

子宮内膜症は臨床的には診断困難な疾患で、摘出標本の組織学的検索で証明される症例が多い。これは特有な診断法の不足によるのみならず、その臨床所見が明確でない為と考えられる。そこで我々は最近2年間の手術別出標本について、その病理組織学的検索を行ない、本症30例を証明したので、その30例について臨床的検討を行ない、次のような知見を得た。本症は

- 1) 全新患者数の0.9%, 全手術例の10.6%にみられ、かなり頻度が高い。
- 2) 40才前後に好発する。
- 3) 不妊症を伴うことが多い。
- 4) 月経が延長し、経血量が増加する傾向がある。
- 5) 3年以内の続発性月経困難症を伴うものが多い。
- 6) 子宮内子宮内膜症に子宮卵管造影術が有力な診断法である。
- 7) 子宮全別術並びに側ないし両側付属器別除を施行し予後が良好であった。

以上の知見が今後の予後の本症の診断的中率の向上或いは治療に役立つことをのぞむ次第である。

質問 (三重大) 小南 吉男
美しい子宮卵管レントゲン像を拝見し御礼申し上げます。全例中かゝるレ線像を見られたのは何例でございましたでしょうか。

回答 (日大) 吉田 孝雄
typisch な所見を得たのは一例のみでした。

2. 子宮粘膜ポリープの臨床的観察

(三重大) 利斉 輝郎

頻度は昭和33年7月より昭和39年6月までの間の患者総数33829名中406名、1.2%に発見された。年齢は各年全層に見られるが、40才以上に急激に増加している。経産婦には346例85.3%に見られ、又、未産婦56例中40例が未妊婦であった。主訴としては、不正出血、接触出血を訴えるものが多いが、膣部びらんなどの合併症もあるため、果して本症に起因する出血かどうか断定出来な

い。妊娠合併例は12.5%に認められ、このうち約半数は出血を訴えたため切迫流産との鑑別が必要であった。

癌性ポリープは4例に見られたが、扁平上皮癌1例、上皮内癌1例、扁平上皮癌の疑1例、悪性乳嘴腫の疑1例であった。又、220例についてパパニコロー氏染色法にも膣スミア検査を施行したが、第(I)型が83.2%、第(II)型が15.2%、第(III)型が0.8%、第(IV)型が0.8%、第(V)型が0%であった。なお癌性ポリープの症例はいずれも第(III)型及び(IV)型であった。粘膜ポリープ発生の原因については複雑であるが、内分泌的因子、機械的刺激、体質の原因が考えられる。又、ポリープと癌とは特に密接な関係があるとは思われないが、ポリープを発見した際の組織学的検索、膣スミア検査の施行等は必要であると考えられる。

質問 (順天堂大) 長峰 敏治

御報告の症例中、子宮体部より発生した例数はどの位ございましたでしょうか。

回答 (三重大) 利斉 輝郎

体部より発生したものは胎盤ポリープを含めて約30例でした。

質問 (日大) 馬島 季麿

1) 胃ポリープは悪性化の傾向が強いが、頸管ポリープは幸いにも悪性化の傾向が少ない。しかしまれには癌化を認めることがあるので、常に組織検査を怠つてはならない。その摘除に際しては組織を損傷させないために私はいつも耳鼻科で使用するシュリンゲを使用している。

2) ポリープの原因の一つとして炎症が重要なものと考えているが、頸管炎またはピランとの合併は何%であったでしょうか。

3) 同一人に反復して発生するのをしばしば経験しているが、反復例は何%に認めましたか。

回答 (三重大) 利斉 輝郎

① 反復したポリープは私は一例を見たのみでした。他医にて処置されたものもあるかも知れません。

② 頸管炎、膣部びらんを合併したものは約半数でした。

3. 石灰化子宮筋腫の2例

(横手市平鹿病院) 斉藤 博之, 菅原幸一郎

我々は最近あいついで2例の石灰化子宮筋腫を経験し、うち1例は術前に診断を下し得たので報告した。

第1例は56才の婦人で9妊8産、51才の時脳溢血にかゝり左半身不随となつた。52才で閉経となつたが、数カ月前より時折り不正出血をみるようになり、子宮癌をおそれて来院した。子宮はやや肥大して固く、腔部には小びらんが認められ、頸管よりは暗赤色の分泌物が出ていた。パパニコロ染色でⅡ型、子宮内膜組織検査では子宮内膜炎の像を示した。子宮を単純全別して内腔を開くと、壁内筋腫で、筋層をはがしてゆくと筋腫結節は直径約3cmで石の様に固く、表面は粗な凹凸があり黄色味を帯びていた。石灰化は表面のみで中心部は普通の筋腫であつた。予後は良好で現在元気に生活している。

第2例は52才の婦人で、47才で閉経。3カ月前に当院外科で胆石の手術を受けたが、退院に当つて骨盤内にレ線写真上丸い像を認めて当科に紹介されて来た。術前に石灰化筋腫の診断がついたが、念のためテレビカメラで観察しながら子宮卵管造影を行い、この丸い像が子宮と

共に動くことを確めた。子宮を腔上部に切断して、第1例と全く同様な石灰化子宮筋腫を得た。術前の血清カルシウムは5.13mEq/l で正常値を示した。

発生頻度は3%前後といわれているが、我々のところの1年半の成績では、28例中2例の7.14%であつた。

追加 (順天堂大) 吉川 栄
症例 36才 事務員

妊娠は1回で昭和35年帝王切開を行つた。術時子宮筋腫があると言われたが手術の必要はないといわれた。

術後、軽度の右下腹痛があり、内科にて腹部単純撮影を行ない、小骨盤腔内に陰影を発見されて来院した。子宮は前傾前屈、超驚卵大で固く、子宮卵管造影法で陰影は子宮体部の右側に接することを認め、術前に診断を確認し、腔上部切断術を行つた。別出物のX線撮影で極めて明瞭な陰影を確認した。

石灰の分析を行うと、炭酸カルシウム74%で他は磷酸カルシウムと思われる。

なお、組織学的にヒアリン変生した部に石灰の沈着を認めた。

第2群 ホ ル モ ン

4. 新しい人排卵誘発剤 F 6066の臨床効果に関する研究

(群馬大)

松本 清一、五十嵐正雄、伊吹 令人
佐藤 恒治、佐藤 昭吾、佐藤 郁夫

我々は最近新しい人排卵誘発剤 F 6066即ち Bis (p-acetoxyphenyl)-cyclohexyliden methane を入手し、臨床応用する機会を得たので報告する。

対象は不妊及び月経異常を主訴として来院した患者のうち、無排卵周期症又は無月経症のものを主として選んだ。投与法は主として1日 200mg～300mg、4～10日間内服させた。

持続無排卵周期症では18例27周期中12周期 44.6%、散発無排卵周期症では7例12周期中8周期 66.7%、続発第Ⅰ度無月経では7例12周期中3周期 25.0%、第Ⅱ度無月経では17例22周期中2周期 9.1%に排卵を認めた。その他稀発月経等を含め全体で排卵誘発を目的とした例では52例78周期中29周期 37.2%に排卵を誘発し得た。

投与前の尿中 F S H及びLHの値はF 6066投与後排卵誘発に成功した例と不成功に終わった例との間には差を認

めなかつた。投与中及び投与後のF S Hの変動は個体差が強く一定の傾向は認められなかつたが、投与中或いは投与後にLHの値が増加する例がかなりの頻度に認められたことは興味深い。

連続測定を行うことの出来た4例のうち排卵した2例では、尿中F S Hがまず増加し、それに次いでLHのピークが出現し、その直後に排卵が認められた。排卵しなかつた2例でもLHの増加が認められた。

質問 (神戸大) 林 要

私共もF 6066を無排卵症に使用しつゝあり、その成績の概要を日本不妊学会に追加発表させて頂きましたが、次の2点に就き御教示下さい。

1) Clomide と対比してF 6066の頸管粘液、腔角化系数に対する作用はどの様か。

私共はこれらに対する所謂 Anti-estrogenicityは Clomide にくらべ、弱いとの印象を持っている。

2) 特に、どの様な症例に対し有効であつたか。

回答 (群馬大) 伊吹 令人

① 頸管粘液に対する影響

排卵例、無排卵例に分けて検索したが、特に一定の傾